

戊辰動乱「諸生派の本意」を推測する

「忠が不忠になるぞ悲しき」

前澤 瑞穂

水戸女子高校 教諭

(徳川ミュージアム会員)

1 諸生派の「水府系纂」と明治以後の記録について

水戸藩には歴代家臣を集録した「水府系纂」がある。これは元禄十二年、光圀がこれ以前の家臣履歴を確かめ、正確な藩士の履歴集を出したのが始まりである。慶応三年に完成し、明治元年に若干の追加補修が行われている。

特に、門閥系の記録は詳細に載っているが、同じ門閥系でも、「諸生派」の系譜は明治以前で終わっている。従って、明治以後の動向については、「水府系纂」でもわからない。因みに、明治元年十月三日、「弘道館の戦い」の後、城外で自刃した、諸生派某士の最後の記載を見てみよう。

『元治元年六月賊徒追討ノ拜命ヲ蒙リ野州太平山ニ赴ク 七月 賊 筑波山ニ移ルニヨリ下妻ニ移リ 砲戦スル 是月 水戸ニ帰陣ス 藤柄町ニテ襲来スル賊徒ト防戦シ敗走セシメル 八月 神勢館ニ於テ砲戦シ 賊徒多クヲ敗走セシメタリ(中略)』
河西治左衛門信義女ヲ娶ル』

以上で終わっている。従って明治以後の動向については子孫や縁者の家に伝わる古文書や口伝に頼る他ない。特に他家に嫁いだ女性からの口伝は貴重である。

先に述べた某士は、大番組で、神道無念流の剣士、五軒町に道場を構え、多くの門弟を育てていた。古くは初代藩主「頼房」の筆頭側室「お勝の方」の実弟を初代として、その七代目が、「佐々木雲八郎正久」私の曾祖父である。某士は水戸を脱出する前、妻と協議離婚、二人の幼児男子を他家に預けて水戸を出た。他家で成長した長男が八代目を継いだ。彼は父が残り、母が預かっていた古文書や縁者の口伝を収集している。以下はそれに基づく推測である。

2 土地の顔役「飯村善蔵」が見た武士らの最期

大塚村(現在の水戸市大塚町)の顔役「飯村善蔵」は、村の山横目を勤め、北辰一刀流の使ってもあった。佐々木の縁者が善蔵の縁者を訪ね、善蔵が記録したという「覚

え書」を見せてもらっている。その概略は次の通りである。

明治元年十月三日の午後、四人の武士が訪れてきた。頭らしい武士が先に姓名を名乗り、続いて他の三人が名乗った。頭の武士が言う。「一昨日からの戦いで傷を負った者がいる。一時休ませて頂きたい、とのこと。善蔵は四人を奥座敷に通して休ませる。暫くして、追っ手らしい数人武士がやって来て、我らは脱走した敵を探している、四人の武士を知らないか、と言う。善蔵はそのような者は知らないという、彼らは土足のまま座席に上がり込み、家捜しを始めた。善蔵は度胸剣法で激しく押し問答し、女房、娘らも加勢して、やっとこさ追い返した。

奥座敷から出てきた頭の武士は、善蔵に礼を述べて次のように語った。

「我らは藩邸(当時、大塚村は宍戸藩内)へ行く途中である。本道は敵にかこまれ通行できない。藩邸への隠れ道を教えて頂きたい」と言う。善蔵は紙に書いて隠れ山みちを教えた。未八刻(午後三時)頃、頭はじめ四人の武士は善蔵と家族にお礼を言いつて善蔵宅を出た。

その日、太陽が西に傾いた頃、隣の娘が善蔵宅へこわごわ駆け込んで来た。ここから半里ばかりの山の中で、四人の武士が割腹したのを遠くから見たと話した。善蔵がその場に駆けつけたが、敵方らしい数人の武士に阻止され、その場所に入れなかった。四人の武士の宍戸藩邸行の目的はなんだったのか、それは善蔵にも解からない。

3 萩 庄左衛門君孝(側用人)父子との別れ

自刃した頭の武士には二人の妹がいた。その一人は、萩 庄左衛門の長男、萩 勇太郎君常の妻になっている。もう一人は門井家に嫁ぎ、昭和十余年まで生存し、兄の慰霊碑の建立や供養に努めていた。

一方の萩 父子は北越から会津に向かう途中の戦いで、庄左衛門が戦傷する。父子は「傷を負うたまま、主君の領土や先祖の地をこの血で汚すことはできない」と父子は、水戸城を避け、袴塚の萩 家菩提寺、本行寺で明治元年十月三日に自刃する。大塚村で自刃した頭の某士と、萩 君常は義兄弟であり、庄左衛門は五十八歳になる党の幹部であった。従つて、某士と萩 父子は同行していたと考えられる。会津から水戸へ帰る途中で父子と別れ、父子は本行寺へ、某士は水戸城へ急ぎ、明治元年十月一日「弘道館の戦い」に参加、敵の多勢に敗北する。

自刃を覚悟した某士は、報告を兼ね、萩 父子に再会し、最期を共にしようと考えたのではないだろうか。

明治元年十月三日、大塚村で自刃したのは、つぎの通りである。

- ・ 佐々木雲八郎正久 大番組 神道無念流道場主 三五〇石 三三歳
- ・ 野澤藤一郎勝長 小姓頭 佐々木道場門弟 百石 二八歳
- ・ 鶴殿内匠広勤 小納戸 百八〇石
- ・ 藤咲小衛門正隆 奥小姓 百石 二二歳

某士ら四人の自刃は十月三日と、萩父子の自刃の日と一致している。萩父子は「弘道館の戦い」に参加した某士らの結果待つての自刃と考えられる。従つて、萩父子は「某士らと別れの際に、自刃の場所を知らせ、戦いの結果報告を予め約束していたのではないか。そのため、某士らは報告を兼ね、萩父子と自刃を共にしよう」と、本行寺に赴き、萩父子と再会することになったと考えられる。

4 某士ら四人が「宍戸藩邸」を目指した目的と最期のナゾ

水戸藩の支藩、「宍戸藩」九代藩主「松平頼徳」は、元治元年。水戸藩主「慶篤」の名代として、藩内党争の收拾のため、大発勢を率いて水戸へ下る途中、天狗派の参入の不測の事態により、水戸城内の「諸生派」と対立交戦となる。大発勢、天狗派共に諸生派と幕軍に敗れ、「頼徳」は反幕の罪を負い切腹する。これにより宍戸藩は改易となる。が、明治元年、新政府により改易が解かれ「頼徳」の父、「頼位」が十代目を継いでいた。（頼位の孫娘が平岡家に嫁いでおり、同家から、小説家「三島由紀夫」が出てゐる。）

なお、某士家と宍戸藩主「松平家」との関係について、藩祖「頼雄」は水戸初代藩主、頼房の七男で、実母は某士家から出ている筆頭側室である。この関係を、萩 庄左衛門も知っていたと思われる。

萩 父子は某士ら四人から、敗北を知り、自刃を覚悟した。その時、四人らも共に自刃したいと願つたが、萩 は必死で説得して四人を寺から出し、その直後、自刃を決行したと推測できる。

では、萩 氏の「説得」の内容は何か。——「直ちに宍戸藩邸に赴き、「頼位」公に謁見し、我らの「本意」を告げ、その結果によつて、己の生死を決するがよい」と。

四人は素直に萩 氏の説得を受け入れ、父子と別れ、藩邸に向かつたと推測する。

四人らは途中、追つ手に道を阻われ、四面楚歌の状態になり、大塚村の山中で自刃することになり、宍戸藩主「頼位」に謁見する目的も果たせなかつたと推測する。

5 諸生派の「本意」——伝うべき主なきままの迷走

さて、諸生派の「本意」はなんだったのか、関係諸家による断片的な資料に基づき、次のように推理し、整理してみた。

「我らは、「本圀寺派」を敵とすることを望んでいないが、討つてくれば戦うほかない。しかし、彼らのいかなる要求にも応じない。我らは薩摩・長州の謀略には反撃するが、「尊王」の精神にはいささかの変わりはない。従つて「朝敵」にあらず、勅命により追討される理由はない。さらに、藩主「慶篤」公から直接なんの君命も頂戴していない。我らは君命に背くつもりはいささかもない。代々の君主への報恩一途と、尊王、徳川一族及び、佐幕藩士らを、徒に「朝敵」とした薩摩・長州への反撃あるのみである。我らは、藩主「慶篤」公に拝謁して「本意」をお伝いし、ご理解を賜りたい。その結果により、君命とあらば「恭順」も吝かではない。なお、君命とあらば、自刃の宣告にも従うつもりである。」

諸生派は十月一日の「弘道館の戦い」の際、城内の先代藩主「斉昭」公の奥方「貞芳院」様に拝謁することを目標にしていたが、本圀寺派兵に阻止され目的達成できずに敗北した。

一方、萩 氏の説得により、宍戸藩主「頼位」に謁見しようとした四人らも、目的達成できずまま自刃してしまった。

結局、「諸生派の本意」と諸士の動向は、それを伝うべき主もなく、理解者も少なく、明治時代に入り、日本幕末史の陰に潜んでいった。

一方、藩主「慶篤」公は、水戸藩から「朝敵」を出してはならぬと、特に歴代藩主への忠誠心と敬慕心の強い諸生派に配慮し、説得のために、三月二十一日、水戸に到着なされた。が、その六日前に「諸生派」は水戸城から脱出していった。

在京、「本圀寺派」は、かつて同派の「天狗党」が倒幕の魁となったことから、官軍の一部とされて、「勅書」(偽勅か)を奉戴し、「慶篤」公より五日先に、諸生派を追討するため水戸に到着している。が、すでに諸生派が城を脱出した六日後であった。それから半月後の四月五日、「慶篤」公は水戸城で病死されている。

諸生派が水戸城を離れる前に、藩主「慶篤」公が入城になっておれば、その後の諸生派の歴史も大きく変わっていたとも考えられる。

残された僅かな記録や口伝を頼りに、このような推測が少しでも殉難諸士の慰霊になれば、縁者の一人として幸いである。

君のため捨つる命は惜しまねど忠が不忠になるぞ悲しき

『市川三左衛門』 辞世の歌

主な史料

- ・「佐々木雲八郎」の口伝録 佐々木雲平
- ・「諸生党・佐々木雲八郎」 白井光弘 新人物往来社
- ・「覚書・幕末の水戸藩」 山川菊栄 岩波書店
- ・「市川勢の軌跡」 市村眞一 茨城新聞社
- ・「水戸市史」 (中巻一・中巻五) 水戸市
- ・「後裔が見た水戸藩騒動の事実」 野澤 汎 ぶらざ茨城
- ・「忠が不忠になるぞ悲しき」 穂積 忠 日新報道
- ・「水戸藩戊辰の戦跡をゆく」 鈴木茂乃夫 暁印書館
- ・「水府系纂」 (佐々木家の部) 県立歴史館
- ・「友部町史」 (幕末の宍戸藩) 友部町
- ・「幕末・維新、水戸藩の明暗」 瀬谷義彦 ひとブックレット
- ・『流星の如く』 瀬谷義彦・鈴木映一 NHK出版